



アジア失明予防の会
Asia Prevention of Blindness Association

2016年度

四条畷高校ボランティア参加者レポート

わたしはこのボランティアを通じて沢山のことを学ばせていただきました。初めは緊張して患者さんに挨拶もまともにできず、どうしようという思いがあったのですが、思いきって話してみると患者さんがとても喜んでくれました。挨拶ぐらいの簡単な言葉しか話せなくても笑顔を見せてくれたことが、本当に嬉しかったです。目薬は限られた量しかなく、一回で確実に患者さんに点眼しなければならないのに、はじめは全然うまく点せなくて少し落ち込んでしまいましたが、先生方にコツを教えてもらったり、何回も点眼をしているうちにうまくできるようになりました。レンズ出しは、患者さんの年齢や症状によって使うレンズが違い、その選び方がなかなか覚えられませんでした。でも、同じグループの子と協力しあって正しいレンズを出すことができました。レンズを入れているダンボールも貴重な資源なので、破らないで何度も再利用しているのは、限られた環境の中でとても工夫されているなと思いました。

手術室の見学はとても感動しました。日本では高校生が手術室に入って目の前で手術を見学できることは絶対になので、とても貴重な体験ができたことを誇りに思います。ベトナム人の医師の方に、“Can you speak English?”と聞かれ、とっさに“Yes!”と言いましたが、実際に英語で話しかけられると全然聞き取ることができず、すごくもどかしい気持ちになりました。そして服部先生が英語で医師の方たちに英語で指示を出している姿を見て、英語を話せることはすごく素敵だと思いました。だから、これから猛勉強して英語を話せるようになりたいです。先生方が手術をしている姿はともかくよくて見とれてしまいました。手術室で他の子が自分で仕事を探して動き回っているのを見て、

「私も頑張らないと、何かできることはなにか」と、仲間からも刺激をたくさんもらいました。服部先生が手術を終えた後に、「言葉がなくても患者さんの笑顔を見れたらそれでいい」とおっしゃっていた言葉に、私はとても感動しました。

わたしは麻酔科医をやりたいと思っていました。でも、池田先生や関山先生に、「麻酔科は患者さんとふれあう機会が少ないから、少し寂しいかもしれない」と、いうようなお話を聞きました。その後、手術を終えた患者さんの回診に行った時や、点眼にいったときに、私は手術をしていないのに、「ありがとう」と、患者さんだけでなくその家族の方も笑顔で握手をしてくれて、服部先生がおっしゃっていた言葉を自分で実感することができました。そのことがとてもうれしくて、「もっと頑張ろう」と思えたので、麻酔科になるかどうかはもう少し考えてみようと思います。このボランティアで家族の温かさ、患者さんを救うことができたときの喜び、限られた道具で患者さんを救うための工夫、医師という仕事の大変さややりがいなど、たくさんを知ることができました。こんな貴重で素晴らしい活動に参加させていただけて本当に良かったです。ありがとうございます。この経験は将来いろいろなところで必ず役に立つと思うので一生忘れません。そして、多くの人に伝えていきたいです。3日間、本当にありがとうございました。



ベトナムボランティアツアーを通して

1年3組 田中亜実

ベトナムボランティアツアーでとても良い経験をさせていただくことができ、心から感謝しています。私の将来の夢は看護師になることです。このボランティアツアーで得た経験が、必ず将来私のためになると思っています。

このボランティアツアーに参加する前は私の中でボランティアというものは「何かをしてあげる」ものだと思っていました。しかし、手術をされている服部先生や他の医師の皆様姿を見てその考えは間違っていると思いました。先生がたは、ただ患者さんを助けたい、患者さんの笑顔が見たいという思いでボランティアをされているのだろーと思えます。

ボランティアツアー初日に手術室に入ったときは自分が何をしたらいいかわからずに、ただ立って手術が終わるのを見ていて、何もできない自分が悔しかったし歯痒かったです。私はまだ医療の知識がないので、今どのような手術をしているのか、医師のかたが今何を求めているのかがわからずに、あたふたする場面がありました。でも、日にちが経てくると仕事にも少しずつ慣れてきて、1日目よりも2日目、2日目よりも3日目と、どんどん自分で見て考えて行動できるようになりました。最終日には、手術の最後に目に軟膏を塗りガーゼを付ける仕事もさせていただき、勉強になりました。手術の助手という仕事にゴールはなく、常にアンテナを張って誰が何を必要としているか考えて行動しなければならないのだと思いました。

初日と3日目に手術前の麻酔点眼をしたとき、患者さんが話しかけて下さることがたくさんありましたが、私はベトナム語が話せないで何を言っているのか理解することができずに歯痒い思いをしました。やはり、言葉が通じないということはとても大変だと思いました。最終日の朝に診察にまわったとき、手術を終えて目が見えるようになり

「ありがとう！」言っている患者さんの笑顔を見たときに、ベトナムでボランティアを続けていらっしゃる服部先生の気持ちが分かった気がしました。人を助け、笑顔にすることのすばらしさを実感した瞬間でした。このボランティアツアーを通して大きく感じたことは人を助けたいという気持ちがいくらあっても、知識と技術がなければ人を助けることはできないのだということです。私も将来服部先生や他の医師の皆様みたいに人を助けることができる人になりたいと強く思います。夢を実現させるために、今自分がすべきことを精一杯頑張らなければならないと実感しました。服部先生がおっしゃっていた「Never give up!」という言葉を中心に留め、看護師になるという夢を絶対叶えたいと思います。

最後に、このボランティアツアーを企画してくださった服部先生、私がベトナムに行くことを了承してくれた両親、様々なアドバイスをしてくださった笠松先生、大賀先生、一緒に様々なことを体験することができた仲間、皆様のおかげでたくさんのことを学ぶことができました。心から感謝しています。

ありがとうございました



ベトナムボランティア研修を終えて

「xin chao」「cam on」私が現地の病院で満足に使えたベトナム語です。もっと勉強しておけば良かった、何度も思いました。言葉が通じない、不安そうな面持ちで手術を待つ患者さんが私に必死に何かを伝えようとしているのに笑ってごまかしているだけの自分もどかしくてたまりませんでした。しかし、オペ室に入っていた看護師の方が廊下に出てきた時、患者さんの横にそっと座って、手を握り、微笑みただけで患者さんが刹那に笑顔で安心した面持ちになったのを見ました。

言葉が通じなくなったら何かを伝えられるのだと気付かされました。

私たちが行った活動は点眼やレンズの搜索などで患者さんと接する機会が多く、日本とは違う環境、決してできない経験の次々に、ボランティアはGIVE & TAKEの精神でありながらも、GIVE < TAKE、私たちが患者さんから受け取るものの方が大きくなっていました。目が見える、そんな当たり前だと思っていたことができなくなった暗闇から脱却することができた時を近くで見守ることができ、医師や看護師の方々が懸命に治療を行う意義がわかったような気がしました。

日本では決して入ることはできないオペ室にも入らせていただきました。その部屋の中で見た光景は鮮明に覚えています。消毒の匂い、医療器具の音、医師や看護師の方々の真剣な眼差し、最後に医師の方がドレープをバサッと上げる瞬間まで克明に。あまりに繊細で神聖な治療を次から次へと終わらせていくチームの皆さんには圧倒されるばかりでした。

患者さんを失明から救いたいという強い思いがあるからこそ精神を集中し続け手術を行えるのだらうと思いました。そして、同時にこの強い思いだけでは患者さんを救うことはできず、医師、看護師としての確かなスキルがなければ救うことはできないという医療の厳しい一面も見ることとなりました。服部先生はこうおっしゃっていました、「人間だから失敗することはある。だけど、同じ失敗を二度と繰り返してはいけない。」と。

2年9組 藤井百恵

私はつい完璧を追い求めてしまい壁にぶち当たり、失敗することを恐れ消極的になってしまふことがよくあり、自分の短所だと思っていたので、この言葉が心にとっても刺さりました。常に視野を広げ、寛容な態度でいらっしゃる服部先生の「NEVER GIVE UP」の精神をいつまでも持ち続けていきたいと思いました。

3日間の中で、人生の先輩としてたくさんのスタッフの皆さんが将来の話をしてくださいました。自分が未だ知らない医療の世界や、人との関わり方など、どれもためになるものばかりでした。オペ室とは180度違った印象に驚きました。自分があまりにも遠く厳しい世界だと思っていた医療の世界が意外にも身近に感じました。

そして、思いました。「やっぱり、医師になりたいな」と。この活動の根底にあった医師になりたいという私の思いは、活動を通してより強大なものとなりました。



私は、今回のベトナムでの医療ボランティアで、本当に素晴らしい体験をさせていただきました。その体験について、一つ一つ振り返ろうと思います。

ボランティア1日目。私は外回りでした。外回りは、患者さんの病室を回り、一人ひとりに点眼をさせてもらうという仕事だったのですが、最初は緊張して、目薬がうまく目に入らず、また、患者さんとのコミュニケーションも「シンチャオ」という挨拶と「カムオーン」というお礼しかすることが出来ませんでした。1日目は半日ということもあり、あっという間に終わってしまいました。

素直な感想は、「半日なのにこんなに大変なのか!」ということでした。でも「自分はこの体験をしたいが為にベトナムまでやってきたのに、こんなところでへばってたまるか!」と気持ちを引き締め、明日は今日よりももっと頑張ろうと思いつつ1日目を終えました。

ボランティア2日目。また、私は外回りでした。1日目と大きく変わった事、それは、患者さんとのコミュニケーションでした。1日目は、こちらも挨拶するだけ、患者さんもお礼をするだけ、そんな距離感だったのですが、2日目は、患者さんと握手をしたりハグをしたりと、近い距離でコミュニケーションをとることが出来ました。

こちらが明るくふるまうと、患者さんもすごく楽しそうにしてくれて、言葉が通じなくても、意志は伝わってきて、なんだかムズムズした気持ちになりました。ベトナム語を話すことが出来たらなあ、と何度も思いました。また、点眼も数をこなすうちに慣れてきて、最初よりもすべての病室を回るのが早くなりました。慣れってすごいなと改めて感じました。自分は、将来看護師になりたいのですが、看護師の仕事も時間をかけて少しずつ慣れていき、ベテランになっていくのかな、と考えたりもしました。

話を戻しますが、病室を回るのがスムーズになったことによって、手術室を1日目よりもじっくり見学することが出来ました。

日本では考えられない、手術をされている真横で、患者さんの目が直接見える場所で見学をさせてもらえるということに、本当に驚きました。「こんなチャンス二度とない!」と思い、じっくり見学させていただきました。この時の景色は、自分の目に焼き付いていて、今でも鮮明に覚えています。こうして2日目のボランティアを終えました。この日は疲労感よりも得たものが多すぎて、本当に充実した一日となりました。

ボランティア3日目。初の内側での仕事でした。内側の仕事は、レンズの整理や、片付け、手術直前の患者さんの点眼などがあったのですが、私は、ほとんどレンズの置いてある部屋で整理、片付けをしていました。レンズの整理については、ベトナムに来る前から聞いていて、でも覚えるだけだから簡単だろうと甘く見ていたのですが、実際は、期限にそって丁寧に並べないといけないし、変更があった場合すぐに必要なレンズを探さないといけないし、本当に大変でした。少しの時間が重大なミスにつながることもあるので、常にすばやく行動することを心がけないといけないと実感しました。

片付けについては、ものの大切さを服部先生から教わりました。先生は、使い古した段ボールを何度も何度も補強して、大切に使われていました。日本には段ボールなんて無数にあるし、無料でもらえます。

だから、なぜ新しい段ボールを使わないのかと、素直に疑問に思いました。ですが、ベトナムでは丈夫な段ボールが簡単には手に入らないということを知り納得がいきました。日本は恵まれている国だと改めて思われました。このようにして、無事ボランティア最終日を終わりました。

私は、3日間のボランティア活動を通して、大変なことも嬉しいことも悔しいこともたくさん感じたけれど、一番強く思ったことがあります。それは、自分は医療に関わる仕事にやはり就きたい、ということです。そして、またもう一度ベトナムに来てこの活動に参加したいと思いました。そう簡単には、うまくいかないと思います。ですが、服部先生から頂いた言葉、「never give up!」この言葉を胸にこれからも頑張りたいと思います。素晴らしい体験をさせていただき、本当にありがとうございました！



ベトナムボランティアツアー

1年8組 池田愛由美

私がこのボランティアツアーに応募したのは、医療関係に興味があったからではなく、“ボランティア”という言葉に惹かれたからです。だから医療に関することはあまり知らないし、日本とベトナムの医療のレベルの差もあまりわからなかったのですが、ハノイの病院に行ってみて手術の様子を目の前で見れたり、患者さんに点眼できたことはうれしかったです。でも、やはり最初はほんとにやっというのかな？と戸惑うことがありました。私にとって一番大きかったことは、患者さんとのコミュニケーションです。点眼に行ったときにとっても嬉しそうに迎えてくれて、言葉が通じないことはわかっているのに必死に話しかけて頂いたり、私達はなにもしていないのに何度も何度も「ありがとう」と言って喜んで頂いて、こんなに深く患者さんに関われることはボランティアの魅力のひとつだと思いました。目が見えなくて苦しんでいるはずなのに、明るく元気がいっぱいだということに驚き、それは今まで苦労してきた、そこから解放されるという希望から来ているのかなと私は思いました。手術が成功して、患者さんだけでなく家族の方も私を抱きしめて喜んでいて、家族の方も一緒に苦労してきたことが伝わり、

服部先生のしていращやることは、ほんとに多くの方に希望を与えているんだなと思い、私もそのようなことをしたいという気持ちがさらに大きくなりました。

でもその反面、手術が失敗するとどうなるかも想像してしまいました。目を治してもらいに行くのに、悪化したり見えなくなったりしてしまうと、言葉に表せないくらいの絶望を感じるのではないかと考えてしまいました。家族の方は医者をも恨むこともあるだろうし、しかも国の違う人となると特にそう思うってしまうような気がしました。私は医療に失敗は無いと勝手に思っていたので、最終日に2人も目の状態が悪化してしまったということを聞いたときは驚きを隠せなかったです。

こういうふうに医療に深く関わってみて、いい面も悪い面もリアルに感じられてよかったです。このボランティアツアーに行く前は、発展途上国の現状を知り、ボランティアの過酷さを学ぶことが私の目的でした。でもそれだけじゃなくて、言語の違う人との関わりやボランティアをする価値や大切さも学びました。

(次頁へ)

お金をもらってしまうとお金のために頑張ってしまう、“患者さんのために“という気持ちが薄れてしまうと思います。ボランティアはふつうに働くより過酷で精神面もきついです。治ったときの喜びややりがいには計り知れないと思いました。これを期にボランティアについてもっと知って、将来、発展途上国のために働けるように頑張ろうと思いました。

このようなボランティアツアーを行っていただき、貴重な経験をさせて頂き本当にありがとうございました。発展途上国のために働くことでこの恩返しをしたいと思います。

日本からみたベトナム

私は学校のボランティア活動でベトナムに行き医療ボランティアをしました。最初は、ベトナムは貧しい国なので患者さんも冷たくあまり歓迎してくれないと思っていました。でも、実際に会うととても笑顔で歓迎してくれて、シンチャオ（こんにちは）というと、笑顔でシンチャオと言ってくれたり、中にはハローと言って声をかけてくれる人もいました。

私たちの仕事の1つは、病室の患者さんたちに点眼をすることでした。最初は、初めて違う国の患者さんと接する上に医療行為を行う立場だったので緊張してしまい、シンチャオと言って目薬をさし、次の病棟へ行くという機械的な作業しかできなくて、どこか寂しい気がしました。違う国の人で言葉も通じないけれど、もう少しコミュニケーションをとりたいと思いました。そこで、2日目は勇気をふりしぼり、シンチャオと言って握手を求めました。すると、患者さん全員が握手を返してくれました。中にはベトナム語で一生懸命話してくれる人もいました。すべては聞き取れなかったけれど、話の途中でカムオン（ありがとう）とおしゃっていました。その患者さんは手術を終えていたので、おそらく目が見えるようになった感謝の気持ちを伝えていたのだと思います。

またこのような機会があれば参加したいと思います。



2年8組 中本美麗

自分が手術したわけではないけれど、「ありがとう」と言われるととても嬉しくなりました。患者さんだけでなく、患者さんの病院に付き添いとしてきている患者さんのご家族もたくさん話しかけてくれました。ベトナム語で話しかけられた言葉を同じように返すだけでとても喜んでくれました。日本では本来看護師が行う患者さんの生活面でのケアをベトナムでは患者さんの家族が行っていて、ベトナムならではの家族一丸となって支える姿をみて、家族の負担はその分大きいけれど、率直に良いなと思いました。

もう一つのわたしたちの仕事は、手術前の患者さんに手術帽子をかぶせたり、手術室に案内することでした。私がこの仕事をしていてとても嬉しいと思ったのは、前の日に病室にいた患者さんが待合室にきたときです。やっとこの患者さんにも順番が回ってきて、これでこの患者さんの目が見えるようになるんだと思うと、嬉しくなりました。そして、次の日の病室回りにいくと、その患者さんがいて、患者さんも私のことを覚えてくれていてハグしてカムオンと言ってくれて、自分はその患者さんでもなければ家族でもないけれど、とても嬉しかったです。

患者さんを手術室に案内するという仕事は日本では考えられないことなので最初は戸惑いました。麻酔は待合室のようなところで行われており手術室の扉はあいたままで、わたしたちでさえ、行き来できるような環境になっていました。そして、数十センチ先で手術をしている様子を見ることができました。

とても間近で見ることができたので、水晶体のにごりが取れていくのが見えました。私は手術道具を渡したり、手術後の患者さんの目にナンコウをぬるという仕事をさせてもらったのですが、それだけでも手が震えていたのに、先生方は、数ミリの厚さのレンズのにごりを取るという非常に細かな作業を、ものの15分程度で終えていました。本当に驚きました。そしてなにより、この先生方をサポートする仕事に就きたいという思いが増しました。

私は高校生でこんな素晴らしい経験ができて良かったです。たった3日間という期間だったので私たちにはわからない苦労もたくさんあると思うけれど、それをも乗り越えるやりがいと楽しさがあると思いました。看護師になるために今からできることを見つけて実行したいです。素晴らしい機会をありがとうございます。

